

百武さんとの出会い、思い出

米澤 富信*

日本応用地質学会名誉会員、そして新潟応用地質研究会名誉会員でもある百武松児さんが去る9月15日、96年の歳（いわい）を重ねられ旅立たれた。

事務局から百武さんと厚誼があった私に追悼文をと依頼され、約50年前を振り返り私が県庁に勤務するきっかけとなった、昭和34、35年頃のことを記して追悼文としたい。

百武さんとの出会い

私が県庁に勤務することになった最大の理由は、当時年間50cm以上の地盤沈下現象の解明のための諸データの収集、解析要員として緊急的に採用されたことに始まる。当時、新潟県は北村県政時代で赤字団体であったため、商工労働部では技術系職員の新規採用がなく、従って公開試験もなかったため臨時的な任用という身分で採用された。

私が配属になったのは商工労働部企業振興課資源開発係で、百武さんはその係長だった。個性の強い技術吏員が10名ほどいた大所帯だった。

臨時的な任用といっても、一応筆記試験があり面接もあった。筆記試験の設問は「新潟県の地質層順とその堆積環境について知るところを記せ（論ぜよ）」というものだったように記憶している。後日談として私の主任教授であった西田彰一氏（新潟大学理学部地質鉱物学科教授）から”あれは自分が百武さんから頼まれて出題したもので、採点も私がした。下駄を十分履かしたから採用まちがない”とお聞きした。百武さんと西田彰一教授とは北大地質の同窓で親交があったため、その後の面接もなんなく終わった。

百武さんは、試験問題は自分が考えた。採点も自分がした。採点結果、面接とも問題なしと課長に報告したので安心して結果を待つようにといていた。

こうして昭和34年4月9日付けで採用になった。

地盤沈下

先にも記したように34、35年が地盤沈下量がピークに達しており、港湾区域が特に著しかった。いかにひどかったかについては以下の報告書の文を紹介する。昭和37年3月出された「新潟の地盤沈下第二輯」のはしがきには、“昭和34年には最大1年間に60cmも沈下するという悲劇的記録が現在（昭和36年）では1年間沈下量が10cm以下に減じ、さらに将来徐々に減速の見透しで、かかる短期間にこのような状況を招来できたことは関係官民の努力の賜である云々”と塚田十一郎知事が書いている。

当時の科学技術庁資源調査会では新潟の地盤沈下に対して8つの仮説をたて、一番疑わしいのは「水溶性天然ガス採取に伴う過剰揚水」としていた。このための調査、資料収集、解析が私の属していた企業振興課資源開発係で担当し、陣頭指揮していたのが百武さんだっ

*新潟応用地質研究会名誉会員

た。企業振興課資源開発係は水溶性天然ガス開発に取り組んでいたもので、当時の通商産業省鉱山局と密接な関係にあった。

従って、今日頻繁に使われている所謂公（鉱）害も同省が担当し、鉱山局開発課からは膨大な調査費が投入され企業振興課が受託する形態を取っていた。

一方、港湾区域の地盤沈下調査、対策については当時の運輸省第一港湾建設局が担当し、通商産業省鉱山局は水溶性天然ガスを採取していた地域を垂直的に（どこの深さでどのくらい沈下が進んでいるか等）調査した。

さらに、建設省国土地理院では広域的に水準測量を繰り返し、平面的な情報収集に当たった。百武さんはこれらの膨大な資料を基に、「新潟の地盤沈下について」を論文に纏め上げ、博士号を取得された。そして、当時県職員では数少ない参事に昇格された。

後日の科学技術庁資源調査会の最終答申でも、新潟の地盤沈下の主原因は「水溶性天然ガス採取に伴う過剰揚水」にあるといわざるを得ない、と結論づけられ百武さんの論文もこの結論に大いに寄与したと思われる。

昭和43年に県庁退職後、第二の職場の開発技研（株）技術顧問の傍ら加茂暁星短大の教授に迎えられ学生指導にあたられた。また、昭和46年には（社）日本技術士会北陸支部に入会、各種技術委員を歴任し、ご活躍された。

百武さんは行政マンとしては稀有な学者肌であり、朴訥としていて部下を叱ったことは一度もなかった。晩年、当研究会の定例会でお会いした時は、すっかり好々爺となっていたが、にこにこした笑顔は昔のままだった。

私も霜を置く歳（いわい）となり、先輩、同僚の訃報を聞くことが多くなった。

百武さんの追悼文を借りて、私の自叙伝の一部とすっかり遠くになった、昔新潟に地盤沈下があったんだと改めて認識してくれる読者がいれば、この拙文もいささかお役にたってくれるのではないかと思っている。

今、百武さんは出身地の村上で永久の眠りについてお聞きしているとお聞きしている。あらためてご冥福をお祈りします。

合掌